

金井湛の《詞》意識

——「キタ・セクスアリス」論のために——

小 倉 齊

1

「キタ・セクスアリス」(『スバル』明42・7)一篇のモチーフについては、「性」を媒介にしての自己認識<sup>1</sup>とか(作者自身における「恋愛」不在のい、われを問う<sup>2</sup>)ものといった見解もあるが、概して当時隆盛であった自然主義文学との関わりの中で論じられることが多かった。たとえば、磯貝英夫は、「キタ・セクスアリス」の中に(想像的な恣意をでるだけ排して厳密に事実につく自然科学的な精神)を見ており、(自然主義の形式をかりて、その自然主義的な、人間への関心、判断の展開をはかったもの)と捉えている<sup>3</sup>。また、唐木順三は、(自然主義を軽蔑し或は揶揄しながらも、その影響を如何ともなしたいといふ位置を示してゐる)と指摘し、「キタ・セクスアリス」への自然主義文学の影響を認めている<sup>4</sup>。あるいは、長谷川泉は、(作者の意図が、どのようにして形づくられ、どのような筋道でこの作品が構成されてゆくかという作品形成の心理過程が長々と説明されている)(序論的な部分)を重視し、「キタ・セクスアリス」は表相だけを見れば、金井湛の性欲史を綴ったものであり(自然主義文学の性欲描写に近い位置にある)ものの、実は鷗外は(自然主義への痛烈な批判をこめ、自然主義文学のアンチテーゼとして「キタ・セクスアリス」を書いた)

としている。<sup>5</sup>同じく「序」の意義に注目する蒲生芳郎は、その要点を（金井博士があえて自分の「性欲の歴史」を書き出すに至る経緯に尽きる）とし、執筆動機を（性欲は、人生において、はたして自然派の作家批評家の語るがごとく重大な意義を有するものであるか、また、それらを滑稽に思う自分は異常に性欲に冷淡であるか）という（二つの疑問）を解くことに見いだしている。<sup>6</sup>さらに、（創作の意図・動機らしきものは本文の始めの部分にも明快に説明されてゐる）とする小堀桂一郎は、（どうせ書くならここまで徹底して書いてみたらどうか、と言はんばかりの、所謂自然主義の小説に対する挑発乃至競合の意識に似たものがうかがはれる）とする。<sup>7</sup>

以上のような先学の見解に見られる、自然主義文学との関連への言及、あるいは「キタ・セクスアリス」執筆のモチーフを（性欲）問題および文壇状況との関わりに限定して論ずる傾向を前にしたとき、いまさら新しい見方を提示する余地はないようにも思われる。鷗外自身、自然派作家によつて席捲された観のある文壇状況、あるいは自然派作家の作品を（人生を写し得たものとして認めてゐる）安易な文壇批評の在りように対して、強い不満を感じていたことは間違いない。「キタ・セクスアリス」執筆より一年ほど前の明治四十一（一九〇八）年三月十七日、フランス滞在中の上田敏に宛ててしたためられた書簡は、そのことを如実に物語る。

当方所謂文壇の批評は国木田、田山の外に作者はないかのやうな偏頗になつて、漱石といふ声すら今日は殆ど聞えません。例えば Anat. France のやうな作でも出たら一応大陳腐として斥けらるゝでせう。それも歴史の研究といへば澀柿派の外にない時代ならば是非もありますまい。

独歩や花袋らに代表される自然派を重んじ、「キタ・セクスアリス」の中で金井湛に（技癢を感じた）と語らせた夏目漱石すら黙殺する文壇批評の（偏頗）に対する鷗外の不満は、かなり根深い。しかし、だからと言つて、（自然主義への痛烈な批判）や（自然主義の小説に対する挑発乃至競合の意識に似たもの）<sup>8</sup>が鷗外を「キタ・セクスアリス」執筆

に駆り立てたとする判断は、あまりに短絡的過ぎはしないか。鷗外の中には、かつてのような批判対象に激しく立ち向かう戦闘的姿勢はもはやなく、一度は〈鷗外漁史はこゝに死んだ〉<sup>10</sup>と宣言してもいる。鷗外は、自然派を尊重する文壇の〈偏頗〉に対する不満を抱いたとしても、それを直接作品にぶつけるようなことはしなかったのではないか。

私は、あえて、当時の文壇状況と切り離して「キタ・セクスアリス」執筆のモチーフを考えることから始めたい。もちろん、(人の行為の動機はわからないものだ)と<sup>11</sup>が云つてゐる。藝術家の物を作る動機も恐らくはわかるまい)とか(人間のする事の動機は縦横に交錯して伸びるサフランの葉の如く容易には自分にも分らない)といつた鷗外の認識からすれば、「キタ・セクスアリス」執筆のモチーフについて思いを巡らすことは、無用の(穿鑿で、あぶない話だ)ということになるのだろうか、とりあえずは、先学の多くが重視してきた「序」について検討することとしよう。

2

鷗外は、「キタ・セクスアリス」の「序」冒頭近くで、哲学者金井湛の大学における講義について、次のような説明をしている。

講義は直観的で、或物の上に強い光線を投げることがある。さういふときに、学生は、いつまでも消えない印象を得るのである。殊に緑の遠い物、何の関係もないやうな物を籍りて来て或物を説明して、聴く人がはつと思つて会得するといふやうな事が多い。Schopenhauerは新聞の雑報のやうな世間話を材料帳に留めて置いて、自己の哲学の材料にしたさうだが、金井君は何をでも哲学史の材料にする。真面目な講義の中で、その頃青年の読んでゐる小説なんぞを引いて説明するので、学生がびつくりすることがある。

この部分は、金井湛の講義の特質を説明するのみにとどまらず、(迂路をとつて本質を衝くといふ)〈いわば言説の戦

略家<sup>14</sup> 金井湛によって書かれるはずの「VITA SEXUALIS」の本質をも示唆する。すなわち、「キタ・セクスアリス」の「序」の冒頭で鷗外は、金井湛が「VITA SEXUALIS」を通じて訴えようとしたものが、それとは（縁の遠い物、何の関係もないやうな物を籍り）る形で、あるいは（新聞の雑報のやうな世間話）を材料にして表出され、最終的には読む者が（はつと思つて会得するといふやうな）真実として（いつまでも消えない印象を）残してゆくことを予告しているのである。

湛は、（一体性欲といふものが人の生涯にどんな順序で発現して来て、人の生涯にどれ丈関係してゐるかといふことを徴すべき文献は甚だしいやうだ）と考え、（おれは何か書いて見ようと思つてゐるのだが、前人の足跡を踏むやうな事はしたくない。丁度好いから、一つおれの性欲の歴史を書いて見ようか知らん。実はおれもまだ自分の性欲が、どう萌芽してどう発展したか、つくづく考へて見たことがない。一つ考へて書いて見ようか知らん）と決意する。そのあと、ドイツから郵送された（性欲的教育の問題を或会で研究した報告）を前に、（教育の範囲内で、性欲的教育をせねばならないものだらうか。せねばならないとした処で、果してそれが出来るだらうかといふ）問題に直面し、（前に書かうと思つてゐた、自分の性欲的生活の歴史の事を）（書いて見て、どんなものになるか見よう。書いたものが人に見せられるか、世に公にせられるかより先に、息子に見せられるかといふことを検して見よう）と思つて、ついに筆を取るのである。以上のような、金井湛自身が一篇の執筆モチーフについて説き明かす部分を読むかぎり、「VITA SEXUALIS」は、（性欲）の発現と（人の生涯）との関係性を明らかにするための自分の性欲史であり、（息子に見せられるかといふことを検）するために書かれたものといふことになるのだが、ことはそう簡単ではない。なぜならば、（おれの性欲の歴史）（自分の性欲的生活の歴史）とは、あくまでも金井湛が真に訴えたいものとは（縁の遠い）（何の関係もないやうな）装置でしかなく、最初の読み手として（息子）を想定したことも、読む者に（強い光線を投げ）（はつと思つて会得）

させるための巧妙な仕掛でしかないからである。

「結末」を見てみよう。(恋愛を離れた性欲には、情熱のありやうがないし、その情熱の無いものが、奈何に自叙に適合しないかといふこと)を自覚した金井湛は、「断然筆を絶つこと」を決意し、次のように考へる。

自分は少年の時から、余りに自分を知り抜いてゐたので、その悟性が情熱を萌芽のうちに枯らしてしまつたのである。(中略)併し自分の悟性が情熱を枯らしたやうなのは、表面だけの事である。永遠の水に掩はれてゐる地極の底にも、火山を突き上げる猛火は燃えてゐる。

「VITA SEXUALIS」が、(一)体性欲といふものが人の生涯にどんな順序で発現してきて、人の生涯にどれ丈関係してゐるかを徴す)べく書かれたものであるならば、その「結末」としての(悟性が情熱を萌芽のうちに枯らしてしまつた)とか(悟性が情熱を枯らしたやうなのは、表面だけのこと)といった言ひまわしは、あまりにも貧弱だ。(性欲)と(人の生涯)とがいかなる関わりをもつかといつた深刻なテーマを追究した結果とは、どうしても考えにくい。その直後に示される(自分は性欲の虎を馴らして抑へてゐる)という自己表白に接すると、その思いは一層強くなる。(性欲)が(人の生涯)に(どんな順序で発現して来)るかの方はいくらか語らせなければ、(人の生涯)にどれ丈関係)するかの方は、厳密にはほとんど全く語らせなかつた<sup>15)</sup>という批判が下されるのも無理からぬところである。しかし、すでに述べたように、(性欲)が(人の生涯)にどれ丈関係してゐるかを徴す)べく書かれた自分の(性欲の歴史)は、訴へるべき真実とは(縁の遠い)装置ではない。だからこそ、「VITA SEXUALIS」には、(性欲)の発現にまつわるエピソードはちりばめられていても、(性欲)と(人の生涯)とがいかなる関わりをもつかについて解く鍵になるような出来事は描かれない。「結末」で示された金井湛の感想めいた言説もまた、(情熱)と(悟性)の衝突というあらかじめ用意されたやうな抽象論におわり、とうてい(性欲)と(人の生涯)とがいかなる関わりをもつかというテーマに対する答へに

はなり得ない。そして、当然のことながら、はじめに読み手として想定されていた（我子にも読ませたくない）という結論に達し、「VITA SEXUALIS」は（文庫の中へばたりと投げ込）まれてしまふのである。

ここで読者は、はたと考えるはずだ。金井湛が「VITA SEXUALIS」を書こうとした真のモチーフは一体何だったのかと。あるいは、一度は書き始められたものの、ついに筆は絶たれ、文庫の底に秘匿されたものは一体何だったのかと。そして、さらに読者は、金井湛が「VITA SEXUALIS」を書き出すに至る経緯から始まって、編年体で記述された（性欲の歴史）告白を挟み、最終的には文庫の底に秘匿されることでおわる物語を、鷗外が「キタ・セクスアリス」として書いた意図を追尋したい思いに駆られるのである。

ここで再び、金井湛が自分の性欲史を書く決意を語った一節を思い起こしてみよう。

丁度好いから、一つおれの性欲の歴史を書いて見ようか知らん。実はおれもまだ自分の性欲が、どう萌芽してどう発展したか、つくづく考へて見たことがない。一つ考へて書いて見ようか知らん。白い上に黒く、はつきり書いて見たら、自分で自分がわかるだらう。

（自分で自分がわかるだらう）というさりげない一言は、案外重要だ。《書く》ことを通して自己の存在そのものを確認したいという切実な思いが込められている。金井湛は何のために（自分で自分がわかる）必要があるのか。自己認識を湛に迫るものは一体何なのか。

金井君も何か書いて見たいといふ考はをりをり起る。哲学は職業ではあるが、自己の哲学を建設しようなどとは思はないから、哲学を書く気はない。それよりは小説か脚本か書いて見たいと思ふ。併し例の藝術品に対する要求が高い為めに、容易に取り附けないのである。

《哲学者といふ概念には、何か書物を書いてゐるといふことが伴ふ》はずなのに、卒業論文執筆以来（なんにも書物

を書いてゐない）金井湛の《書く》営みには、《常に《書くかない》という《書く》ことを放棄する方向への回路が出来ている》<sup>16</sup>とも言えよう。しかし、それでもなお、哲学を職業としながら、《それよりは小説か脚本かを書いて見たい》という思いを吐露する金井湛の内部には、公的な立場や職業による束縛によつても抑え切れない創作への意欲、文学への要求が、深く根をおろしている。そして、当然そこには、なぜ自分にとつて哲学よりも文学なのかを問う意識が働くはずである。だからこそ湛は、自分自身に哲学よりは《小説か脚本かを書いて見たいと思》わせる何かを求めて、《白以上に黒く、はつきり書いて見》る必要に迫られるのだ。あるいは、《性欲の歴史》を書くという仕掛をしつらえながら、年少期の生活環境や意識の発達過程を記す必要に迫られるのだ。

ところで、金井湛は「キタ・セクスアリス」ではじめて登場した人物というわけではなかった。すでに、「仮面」〔「スバル」明42・4〕や「魔睡」〔「スバル」明42・6〕において、その性格や気質についてさりげなく話題にされていた。「仮面」では《用意周到》な性格だと評され、「魔睡」では法科大学教授大川渉・医科大学教授杉村茂・文科大学教授金井湛の三人を比較しながら、《氣質も頗る似寄つてゐる。中では金井湛君が少し神経質な処丈違つてゐる》という指摘がなされている。こうした性格や氣質についての言及は、「キタ・セクスアリス」の主人公金井湛にも当てはまると考えてよいだろう。「キタ・セクスアリス」において鷗外は、《書く》という特殊な能力を備えている<sup>17</sup>。金井湛が、《おれの性欲の歴史》という形を籍りて《少し神経質》で《用意周到》な自己を確認する過程を描いたのである。そしてそれは、鷗外の最も本質的な部分、すなわち軍医でありながら文学への強い要求を打ち消すことのできぬ作家鷗外の根底にあるものを確認する営みでもあった。

さて、金井湛の自己確認の過程を追うとき、重要な意味をもつのが、故郷での原体験とも言うべき〔国詞〕にまつわる話と上京後の〔国詞〕〔東京詞〕をめぐる三つのエピソードである。

まず、金井湛は、故郷での六歳の時の記憶から語り始める。〔廢藩置県〕になつて、県庁が隣国に置かれることになつたので、城下は俄に寂しくなつた」という叙述に見られるように、明治維新という政治的変革の波をかぶり、封建的秩序が崩れ始めた（中国の或る小さいお大名の御城下）が舞台である。湛は近所の小原という後家の家に遊びに行き、後家と町方の娘とによつて枕絵を見せられる。

「しづさあ。あなたはこれを何と思ひんさるかの。」

（中略）

「足ぢやらうがの。」

をばさんも娘も一しよに大声で笑つた。足ではなかつたと見える。僕は非道く侮辱せられたやうな心持がした。

（中略）

僕は二人の見てゐた絵の何物なるかを判断する智識を有せなかつた。併し二人の言語挙動を非道く異様に、しかも不愉快に感じた。

見せられた枕絵が理解できない湛は、後家と娘の〔笑い〕に〔非道く侮辱せられたやうな心持〕を味わい、自分の理解の範囲外にある。二人の言語挙動を非道く異様に、しかも不愉快に感じ、小原の家を立ち去る。そして、ここで味わたつた〔侮辱せられたやうな心持〕〔不愉快〕は、七歳になつて藩の学問所址に出来た学校に通う途中、〔ちいさん〕

に冷やかされた折の反応にも持ち越される。

内から学校へ行くには、門の前のお壕の西のはづれにある木戸を通るのである。木戸の番所の址がまだ元の儘になつてゐて、五十ばかりのぢいさんが住んでゐる。女房も子供もある。子供は僕と同年位の男の子で、襦袢を着て、いつも二本棒を垂らしてゐる。その子が僕の通る度に、指を銜へて僕を見る。僕は厭悪と多少の畏怖とを以て此子を見て通るのであつた。

(中略)

ぢいさんもおれの方を見た。濃い褐色の皺の寄つた顔で、曲つた鼻が高く、頬がこけてゐる。目はぎよろつとしてゐて、白目の裡に赤い処や黄いろい処がある。ぢいさんが僕にかう云つた。

「坊様。あんたあお父さまとおつ母さまと夜何をするか知つてをりんさるかあ。あんたあ寝坊ぢやけえ知りんさるまあ。あは、ゝ。」

ぢいさんの笑ふ顔は実に恐ろしい顔である。子供も一しよになつて、顔をくしゃくしゃにして笑ふのである。

(中略)

ぢいさんがそんな事を言つたのは、子供の心にも、*profanation* である、褻瀆であるといふやうに感ずる。お社の御簾の中へ土足で踏み込めといはれたと同じやうに感ずる。そしてそんな事を言つたぢいさんが非道く憎いのである。

金井湛は、(襦袢を着て、いつも二本棒を垂らしてゐる) (ぢいさん) の子供を見るたびに (厭悪と多少の畏怖) の念を抱くが、(ぢいさん) の不気味で醜い容貌を目にしたときもほぼ同じ念を抱いたはずである。封建的幕藩体制の残滓とでも言うべき (番所の址) に住む貧しい (ぢいさん) 父子の外見の様子が、湛に (厭悪) と (畏怖) の念を抱かせる

理由は、ここでは明白ではない。ただ、両親の性生活について冷やかされる以前にすでにおびえの感情を抱いていたことに注意すべきであろう。小原の後家の家の場合と同じように、湛は〈ちいさんの笑ふ顔〉を恐ろしいと感じ、憎悪の念を抱くのである。

十歳の年の秋、旧暦の盂蘭盆の盆踊を見に行つて聞いた卑猥な話もまた、湛に不快感を覚えさせる。

僕の国は盆踊の盛な国であつた。旧暦の盂蘭盆が近づいて来ると、今年も踊が禁ぜられるさうだといふ噂があつた。併し県庁で他所産の知事さんが、僕の国のものに逆ふのは好くないといふので、黙許するといふ事になつた。

廢藩置県によつて〈俄に寂しくなつた〉〈御城下〉にとつて、この盆踊は旧藩体制の秩序の名残であり、沈みがちな人々の氣持を昂揚させ、失われゆく共同体の記憶を蘇らせる絶好の機会でもある。しかも、〈皆頭巾で顔を隠して踊る〉という覆面の効果が〈精神の放鬆と弛緩<sup>ほろ</sup>〉をもたらし、ついには性の解放につながることは、容易に想像される。

僕は踊を見てゐるうちに、覆面の連中の話をするのがふいと耳に入つた。識りあひの男二人と見える。

「あんたあゆうべ愛宕の山へ行きんさつたらうがの。」

「嘘を言ひんさんな。」

「いいや。何でも行きんさつたちふ事ぢや。」

かういふやうな問答をしてゐると、今一人の男が側から口を出した。

「あそこにああ、朝行つて見ると、いろいろな物が落ちてをるげな。」

跡は笑声になつた。僕は穢い物に障つたやうな心持がして、踊を見るのを止めて、内へ帰つた。

覆面の男二人が〈国歌〉によつて愛宕の山の男女の交歓とその跡始末の朝の光景について語り合ふ様子、そしてそれに伴う〈笑声〉に対して、湛は不快感を隠そうとはしない。潔癖な子供心ゆえの不快感と言へるが、金井湛が、禁止さ

れそうだという噂の中で黙許されたこの年の盆踊がもつ特別の意味に気付くことは、あり得ない。《国詞》で盆踊にまつわる卑猥な話をする覆面の男たちの中にある、久し振りに味わう昂揚した気分を、湛は共有できないのだ。

以上とりあげた、故郷での《性》にまつわる原体験とでも言うべきものは、いずれも《国詞》あるいは《国詞》を使う人々と金井湛との位置関係を示している。すでに、《小原の「後家さん」や町家の娘、「番所址」の「ぢいさん」一家との接触によって意識された当惑感、十歳になったときの一、族、上、京にからまる問題と深処で結びついているようだ》との指摘があるように、《内を東京へ引き越すやうになるかも知れないといふ話》が起こっている折に母親から一家の上京について他言を禁じられたことは、湛の故郷の人々に対する意識に強く作用をしたはずだ。

何故人に言つては悪いのかと思つて、お母様に問うて見た。お母様は、東京へは皆行きたがつてゐるから、人に言ふのは好くないと仰やつた。

《皆行きたがつてゐる》東京は、明治維新後の地方士族にとって、立身出世の道を切り開くことのできる場所であり、新しい生活への可能性に充ち充ちた場所でもあった。しかし、当然のことながら、小原の《後家さん》や《番所址》の《ぢいさん》一家のように上京の夢が叶わず《国》に留まることを余儀なくされる人々もいたはずで、故郷を離れ、上京することは、故郷を捨て、裏切ることであり、故郷に残らざるを得ぬ人々の目を憚りつつ実行されるべきものであった。これは、金井湛の場合も同様で、上京についての他言を禁じられることで、故郷の人々に対する湛の警戒心は強まり、《国詞》あるいは《国詞》を使う人々の挙動に対し、湛は敏感にならざるを得ない。上京以前の湛の原体験とも言うべき三つのエピソードで示された畏怖・憎悪・不快の念は、単に枕絵や性的揶揄や卑猥な話に対するものではない。むしろ、言語挙動・笑いに対して、あるいは、自己を背後から監視する《詞》であるところの《国詞》に対して示されたものと言えよう。故郷を捨てて上京する湛にとって、《国詞》は単に性的記憶に関わる《詞》ではなく、自己を背後

から監視する《詞》であり、それゆえに畏怖・憎悪・不快の対象となる《詞》なのである。そして、こうした故郷での《詞》にまつわる原体験によって、金井湛は上京後も《詞》に敏感にならざるを得ない。

上京後の湛は、十一歳のとき、〈旧藩の殿様のお邸〉に勤めていた涅槃という家従がお屋敷では《国詞》を使い、絵草紙屋や楊弓店の女に対しては自在に《東京詞》を使うという二枚舌に接する。涅槃は湛を外出に誘うとき、〈しづさあ。居りんさるかあ。今からお使に行くけえ、一しよに来んされえ。浅草の観音様に連れて行つて上げう〉と云う。ところが、浅草の絵草紙屋の店番の年増の前では、〈お上さん。これを騙されて買つて行く奴がまだありますか。は、は、は。〉と巧みな《東京詞》を話してみせ、吸口を袖で拭いて烟管を指し出す楊弓店の女に対しても、〈榛野でなくつては、拭かないのは飲まして貰へないのだね〉と《東京詞》で軽口をたたく。

僕は子供ではあつたが、問答の意味をおほよそ解した。併しその問答の意味よりは、涅槃の自在に東京詞を使うのが、僕の注意を引いた。そして涅槃は何故これ程東京詞が使へるのに、お屋敷では国詞を使ふだらうかといふことを考へて見た。国もの同志で国詞を使ふのは、固より当然である。併し涅槃が二枚の舌を使ふのは、その為めばかりではないらしい。彼は上役の前で淳樸を装ふ為めに国詞を使ふのではあるまいか。僕はその頃からもうこんな事を考へた。

涅槃の二枚舌に接することで、湛は二種類の《詞》が使われる場面の違いについて意識させられる。〈上役の前〉という公的な場面と〈女〉の前という私的な場面との違いである。ただし、ここで言う公的な場面とは、〈旧藩の殿様のお邸〉の中の〈上役の前〉という、きわめて限定された場面ではない。そこで用いられる《国詞》に〈淳樸を装ふ為め〉の機能しか認めない湛の眼は、なかなか鋭い。《国詞》は、かろうじて旧藩的秩序・体制が残っている〈お邸〉の内側という限定された世界で〈淳樸を装ふ為め〉には機能するが、〈お邸〉の外の世界では《東京詞》に太刀打ちでき

ないのである。

涅槃はこのことを十分認識した上で二枚舌を使っている。長谷川泉の指摘<sup>20</sup>を借りるならば、「涅槃が淳樸を装うのは、悪所通いをする平生を秘匿するため」であり、「東京詞を自在にあやつるにいたったのは、田舎者たることを相手の女に察知されることを嫌厭するがためである」ということになる。金井湛が涅槃の二枚舌の中に見てとつたものは、二種類<sup>21</sup>の《詞》の違いではなく、二種類の《詞》を使いこなす、秘匿すべき別の人格の存在でもあった。

この時点での金井湛が、《国詞》に否定的であり、「東京詞」に対してある可能性を見ていたことはほぼ間違いない。吉原へ行ったことを《国詞》で話す家従どもについて「大抵菊石であつたり、獅子鼻であつたり、反歯であつたり、満足な顔はしてゐない」と、かつて自分を揶揄した《番所の址》の「ちいさん」父子につながるような受け止め方をしてゐるのに対し、「お上のお療治に来る」《江戸兎》の銀林のことを家従たちと比較して「余程賢いと思つてゐた」と述べ、その銀林によって連れて行かれた寄席で吉原入門とも言うべき落語を聴きながら、「なる程東京といふ処は何の知識を攫得するにも便利な土地だ」と感嘆したりすることは、それを物語る。しかし、「江戸兎」銀林を「余程賢い」と思つたのは、あくまでも「旧藩の殿様のお邸」の長屋に入つていた十一歳のときのことであり、落語から得た「おかかんこを頂戴する」といふ奇妙な詞<sup>22</sup>も、後には「僕の記憶に無用な負担を賦課した詞の一つ」として否定されているように、この時点で《東京詞》に見いだした可能性は、幻想でしかない。

十三歳で《東京英語学校》に入り、寄宿舎生活を始めた頃の体験は、やはり《国詞》にまつわるものである。湛は、同室の鰐口弦という男から、折々訪れる父が《国詞》で湛を訓戒するのを揶揄される。鰐口は、父の声色を使って、「精出して勉強しんされえ。鰐口君でもどなたでも、長者の云ひんさることは、聴かにやあ行けんぜや。(中略)土曜には待つとるから、来んされえ。あは、ゝ、ゝ」とからかったり、父に「来んされえ」という綽名をつけたりもする。鰐口

の擲揄が、あくまでも湛の父親の《国詞》に向けられたものであることは間違いないのだが、湛の東京での立身出世への期待の大きさと《国詞》による激励に応えんとする湛の精勵ぶりを皮肉っぽく浮き彫りにしていることも確かである。湛は《国詞》への擲揄を通して自分の置かれた位置を思い知らされるわけだ。さらに、「あの来んされえが君のおつかさんと孳尾んで君を拵へたのだ、あは、、、、、」などと「言われると、《お国の木戸にゐたお爺さん》によつてからかわれた記憶が蘇る。これもまた、不愉快な《国詞》にまつわる体験である。

十四歳の夏休み、《お邸の會計》をしている者の息子で《尾藤裔一といふ同年位の少年》と《好い友達》になつた頃の体験は、《東京詞》に対する湛の意識を決定づける。《八月の晴れた日の午後二時頃》、湛が尾藤の家に遊びに行くとき障子はしめきられ、内はひっそりとしている。

「裔一君。」

返事をしない。

「裔一君はゐませんか。」

障子が開く。例の髪を項まで分けた榛野が出る。色の白い、撫肩の、背の高い男で、純然たる東京詞を遣ふのである。

「裔一君は留守だ。ちつと僕の処へも遊びに来給へ。」

かう云つて長屋隣の内へ帰つて行く。鳴海絞の浴衣の背後には、背中一ぱいある、派手な模様がある。尾藤の奥さんが閨際にいざり出る。水浅葱の手がらを掛けた丸鬘の鬘を両手でいちりながら、僕に声を掛ける。奥さんは東京へ出たばかりださうだが、これも純然たる東京詞である。

「あら。金井さんですか。まあお上んなさいよ。」

しぶしぶ縁側に腰を掛けた湛は、側へ「体がひつ附くやうにすわつた」奥さんについて、「目も鼻も口も馬鹿に大きい人で」(口が四角なやうに)感じる。「僕は斎一君が大好きです」と言う湛に対して、「わたくしはお嫌」と「頬つべたをおつ附けるやうに」横から顔を覗き込んだ奥さんの息が顔に掛かった途端、湛は「急に奥さんが女であるといふやうなことを思つて、何となく恐ろしく」なり、慌てて帰るのである。

湛は、榛野と斎一の継母との密会の場面に出くわしたわけだが、二人が「純然たる東京詞」を使う点にこだわっている。すでに、家従たちの雑談や涅槃と楊弓店の女とのやりとりの中で、色事に通じた美男として話題にされていた榛野が「東京詞」を使いこなすのは十分予想されることなのだが、「東京へ出たばかり」の奥さんが「純然たる東京詞」を使うことへの不審の念は強い。奥さんは密会の相手榛野に合わせて「純然たる東京詞」を使いこなすのであろう。湛は、秘匿されるべき密会の場面で使われた「純然たる東京詞」に不快感を覚えるとともに、「純然たる東京詞」を見事に使いこなす榛野や奥さんの中に、同僚の家従たちを相手にしたときや夫・子供を相手にしたときは別の人格を見いだしながら、怪訝に思ふのである。

さて、これまでとりあげた上京後の「国詞」と「東京詞」とをめぐる三つのエピソードからは、「国詞」だけでなく「東京詞」に対しても不快や畏怖を感じる金井湛を見いだすことができる。「国詞」「東京詞」という異質な二つの「詞」の狭間に在って、湛は、自分の存在の原点になるやうな「詞」、自分の生の証になるやうな「詞」を見いだせないでいる。それは、人々の鋭い視線を感じながら後にした「国」にも立身出世の夢を求めて移り住んだ「東京」にも居場所を見いだせぬ湛の姿でもある。さらにわれわれは、金井湛の「詞」意識の奥底に、「国」を捨て「東京」で立身出世の道を歩もうとした知識人たちの苦悩の典型的な在りやうを見ることが出来るだろう。そして、そこに鷗外自身の上京前後の体験が投影していることも言うまでもない。

鷗外が上京前後の自分について直接触れた文章はいくつかあるが、「僕が十四五歳の時」〔「少年世界」明42・9〕で紹介された次のエピソードは、上京後の鷗外のある不機嫌な気分の一端を物語っている。

渡銭は文久一つ即ち一厘五毛であつた。ところが或る時日曜日の朝向島へ往くのに、その文久が無かつた。そこで大いに困つたが、渡場の傍に材木問屋があつたのを見て、その帳場の爺さんに、渡銭にするのだが、文久を一つ明日まで貸してくれまいかと云つた。爺さんが、え、朝つばからいま／＼しいと云ひながら、兎に角文久は出してくれた。私は言草が癩に障らぬではなかつたが、必要に迫られて借りた。翌日それを持つて往つて返すと、爺さんはいらないと云つた。私は腹が立つたから、文久を爺さんの顔に投げ附けて、一しよ懸命駈けて逃げた。

短氣と氣つぶのよさが同居する生粋の江戸っ子らしい爺さんとのやりとりの中で、異質な《詞》や価値観に触れ、戸惑い、傷ついている少年鷗外を垣間見ることのできるエピソードである。おそらく鷗外は、他にもこれに似たことを数多く体験したはずである。こうした体験の積み重ねが、上京以前とそれ以後との生活の連続感を断ち、《国》にも《東京》にも居場所を見いだせないような不安な気分を味わわせるのだ。

《国詞》《東京詞》のいずれを話す自分にも自分らしさを感じることができないという少年期の体験は、後の鷗外の《書く》営みに大きく影響している。鷗外が評論や小説の中で、言葉の概念規定・意味規定に拘泥したことは、よく知られている。さらに、外国語混じりの日本語文というのもよく知られた特徴の一つだ。これらの特徴は、《名》を聞いて人を知らぬと云ふことが随分ある<sup>21)</sup>とか《或る国民には或る詞が関けてゐる。(中略)それは或る感情が関けてゐるからである》<sup>22)</sup>といった言及に見え隠れしている、埋めることのできぬ《物》と《名》との距離への自覚と、それゆえに《詞》に対して《神経質》なほど《用意周到》であらねばならなかつた鷗外の苛立ちとが、形となって現れたものである。そして、その根底には、《国詞》と《東京詞》の狭間で揺れ動いた少年期の《詞》にまつわる原体験とも言うべきもの

を見いだすことができるはずである。

さて、以上見てきたように、「キタ・セクスアリス」は、単に自然主義を意識して書かれた金井湛の性欲史というわけではなかった。われわれは、「キタ・セクスアリス」に書かれた《国詞》《東京詞》をめぐる話とそこで明らかになった金井湛の《詞》意識を通じて、鷗外の《書く》営みの出発点とも言うべきものを示唆される。鷗外にとって《書く》ことは、自分の存在の原点になるような《詞》、自分の生の証になるような《詞》を探し求める営みであった。まさに「キタ・セクスアリス」一篇は、鷗外文学の原風景を描いた作品なのである。

注

- (1) 竹盛天雄「キタ・セクスアリス」とその周辺〔鷗外 その紋様〕小澤書店 昭59・7)
- (2) 重松泰雄「金井湛——「キタ・セクスアリス」〔国文学解釈と鑑賞・臨時増刊号〔森鷗外の断層撮影像〕〕昭59・1)
- (3) 磯貝英夫「鷗外と自然主義」〔国文学〕昭40・4)
- (4) 唐木順三「キタ・セクスアリス」〔森鷗外〕世界評論社 昭24・4)
- (5) 長谷川泉「鷗外の自然主義に対する反応」〔鷗外「キタ・セクスアリス」考〕明治書院 昭43・7)
- (6) 蒲生芳郎「キタ・セクスアリス」論〔日本文学ノート〕昭46・3)
- (7) 小堀桂一郎「鷗外の創作(二)——初期三部作と明治四十二年度の詩作——」〔鷗外選集・1《解説》〕岩波書店 昭53・11)
- (8) 注(5)に同じ。
- (9) 注(7)に同じ。
- (10) 「鷗外漁史とは誰ぞ」〔福岡日日新聞〕明33・1・1)
- (11) 「当流比較言語学」〔東亜之光〕明42・7)
- (12) 「サフラン」〔番紅花〕大3・3)
- (13) 注(11)に同じ。
- (14) 大屋幸世「キタ・セクスアリス」論——《制度》としての《性》〔別冊国文学・37《森鷗外必携》〕平1・10)
- (15) 中野重治「小説十二篇について」〔鷗外 その側面〕筑摩書房 昭47・3)

- (16) 注 (14) に同じ。  
(17) 注 (1) に同じ。  
(18) 長谷川泉「金井湛十歳の体験」(鷗外「キタ・セクスアリス」考) 明治書院 昭43・7  
(19) 注 (1) に同じ。  
(20) 長谷川泉「金井湛十一歳の体験」(鷗外「キタ・セクスアリス」考) 明治書院 昭43・7  
(21) 注 (12) に同じ。  
(22) 注 (11) に同じ。